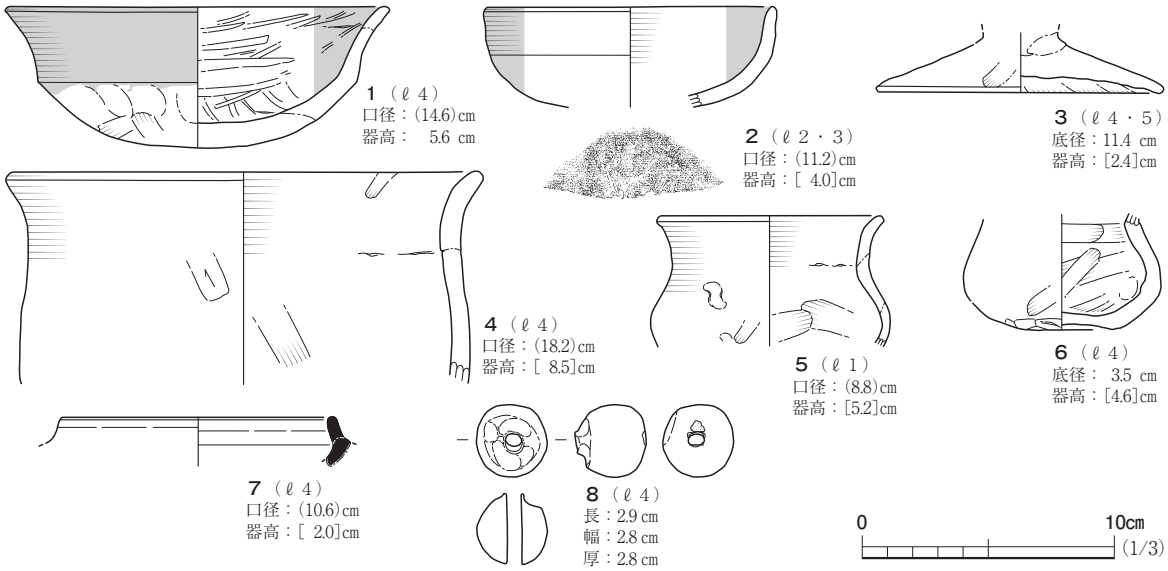


図64　６号流路跡出土遺物

している。ℓ３は火山灰を主体とする灰黄褐色砂質土でℓ２に近質する褐灰色粘質土を斑状に含んでいる。帯状もしくは粒状に堆積している。火山灰分析の結果、榛名伊香保テフラ（Hr－FP）の再堆積という結果を得た。ℓ４は腐植物を微量に含む灰色粘土を基調とし、部分的に細砂がラミナ状に堆積している。ラミナ状の堆積を示すことから、一定の水量があり流路として機能していた際に堆積した土と判断した。珪藻は湿地環境の種が産出されたことから、流路内やその周辺が湿地であった可能性がある。ℓ５は炭化物粒を微量に含む灰色粘質土で、南側の壁際に三角堆積している。土質の特徴から、ℓ１～３は流路跡が埋没後に堆積した土で、ℓ４・５は流路跡が埋没中に堆積した土と判断した。ただしℓ１の最下面では、再度流路として機能していた可能性がある。

遺　　物（図64、写真66）

本流路跡からは、土師器437点、須恵器１点、弥生土器１点、土製品１点が出土しており、このうち土師器６点、須恵器１点、土製品１点を図示した。土師器はℓ１から211点、ℓ４から133点とℓ３の火山灰を前後して、定量数が出土している。

図64－１・２は土師器の杯である。１は丸底で体部中ほどに段を持ち、そこから口縁部に向かって外反する。外面は段より上位はヨコナデ、下位からはユビナデやユビオサエが施されている。内面にはヘラミガキが施されている。赤彩は内面が全面、外面は段より上位に施されており、塗分けたものと判断している。２は湾曲しながら立ち上がり、口縁部付近で直立する。内外面には、赤彩が施されている。底部の外面には、焼成前の線刻が１条認められる。

図64－３は土師器の高杯の裾部である。短脚で、下端部に向かって末広がりとなる。内外面にはユビナデが施されている。

図64－４・５は土師器の甕である。内外面にはヨコナデが施されている。４は体部がわずかに内傾しながら立ち上がり、口縁部で外傾している。体部外面にはヘラケズリ、内面にはユビナデが施されている。５は小型品で、体部はつぶれた球形となり、口縁部で外反する。内外面にはヨコナ

デやユビナデが施されている。体部の外面には、粘土屑が付着している。

図64－６は土師器の小型壺である。底部は平底で凹み、体部は下膨れ状となる。底部付近の外面は、ヘラケズリやユビナデが施されている。内面はユビナデやユビオサエが施されている。

図64－７は須恵器の杯身である。口縁部付近の小片で、「く」字形に内傾し、口縁端部は丸く整形している。下部は、粘土紐の積み上げにより剥離している。内外面にはロクロナデが施されている。

図64－８は土製の丸玉である。円形を基調とし、中央に穿孔が１つ認められる。表面の穿孔の外縁部には、連続したユビオサエが施されている。

ま と め

本流路跡は概ね北東・南西方向に延び、長さは判明した値で2.04m、幅は最大で15.8m、検出面から掘削可能面までの深さは、最大71㎝を測る。ℓ３は火山灰を主体とする灰黄褐色砂質土で、火山灰（Hr－FP）という結果を得た。

本流路跡は、出土した土師器の特徴や火山灰の特徴から、古墳時代中期の５世紀前半には形成され、古墳時代後期の６世紀第２四半期には埋没したと考えられる。

７号流路跡　ＳＤ７

遺　　構（図65・66、写真46・47）

本流路跡は、115号水路調査区の中央部、115－12～14グリッドのＬⅢ上面で検出された。牛川から南に95m程離れた沖積地上に立地する。検出面の標高は8.90～9.00mである。本流路跡と重複する遺構は無く、南側には５号住居跡が位置する。本流路跡の北東･南西側は調査区外に伸びている。

本流路跡はＬⅢの検出作業時の際、広範囲にＬⅡｃ～ｅが遺存していることから、流路跡もしくは自然の窪地と考え、人力で掘り下げを行った。調査が進捗するに従い、火山灰（ℓ４）やラミナ状の褐灰色細砂（ℓ６）を確認したことから、流路跡と認識した。水路工事の掘削が及ぶ深さにまで人力で掘り下げを行ったところ、両岸の下端付近で底面は確認できたが、中央部では深くなり、底面が確認できないことから、県教委に報告を行った。県教委から、大部分で流路跡の底面を確認できたことから、現状の掘削可能面の記録までに留めるよう指示があり、対応した。

本流路跡の上位に堆積するＬⅡｂ～ｅについて、調査時は純層で堆積しているものと判断していた。しかし後にℓ４が榛名伊香保テフラであることが判明し、６世紀初頭の遺構が掘り込まれているＬⅡｂより下層に６世紀第２四半期のℓ４が堆積するという矛盾が生じた。再度、土層断面の写真を確認した結果、本流路跡の上位に堆積するＬⅡｂ～ｅは流路のくぼみに流れ込んだ２次堆積で、掘込み面はＬⅡｂと再認識した。よって図65には、想定される断面上端を破線で示している。

本流路跡は概ね北東－南西方向に延び、長さは判明した値で1.98m、幅は最大で12.84m、検出面から掘削可能面までの深さは、最大で43㎝を測る。壁面は南側は急に、北側は緩やかに立ち上がる。底面は下端の周辺は平坦となり、中央に向けて緩やかな下り傾斜となる。本流路跡の底部には、ＬⅢが認められる。

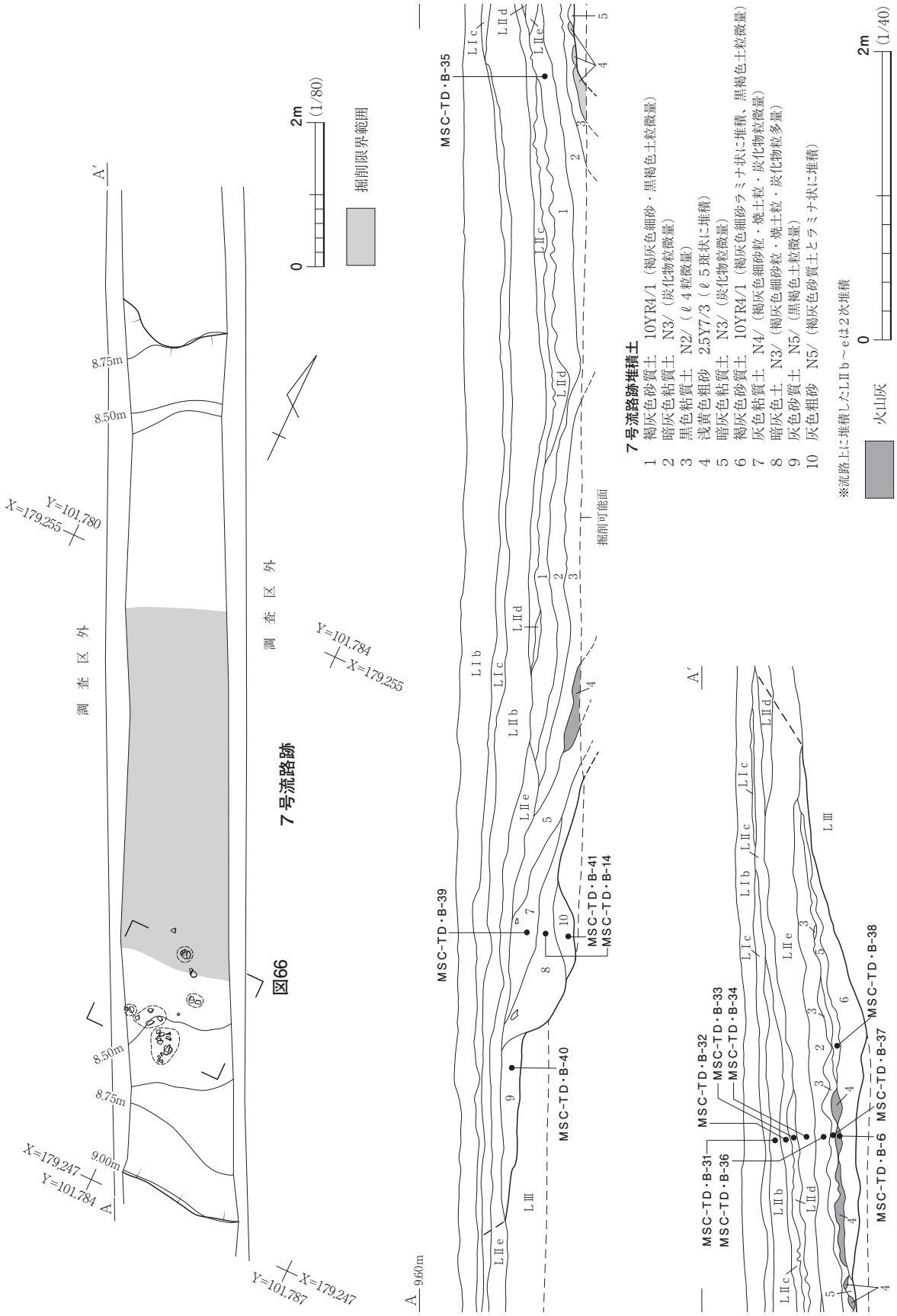

7号流路跡
図66
調査区外
調査区外
掘削限界範囲
0
2m
(1/80)
A
A′
8.75m
8.50m
8.50m
8.75m
9.00m
9.60m
X=179,255
Y=101,780
X=179,255
Y=101,784
X=179,247
Y=101,784
X=179,247
Y=101,787
MSC-TD・B-35
MSC-TD・B-39
MSC-TD・B-40
MSC-TD・B-41
MSC-TD・B-14
MSC-TD・B-31
MSC-TD・B-36
MSC-TD・B-32
MSC-TD・B-33
MSC-TD・B-34
MSC-TD・B-6
MSC-TD・B-37
MSC-TD・B-38
掘削可能面
7号流路跡堆積土
1 褐灰色砂質土　10YR4/1（褐灰色細砂・黒褐色土粒微量）
2 暗灰色粘質土　N3/（炭化物粒微量）
3 黒色粘質土　N2/（ℓ4粒微量）
4 浅黄色粗砂　2.5Y7/3（ℓ5斑状に堆積）
5 暗灰色粘質土　N3/（炭化物粒微量）
6 褐灰色砂質土　10YR4/1（褐灰色細砂ラミナ状に堆積、黒褐色土粒微量）
7 灰色粘質土　N4/（褐灰色細砂粒・焼土粒・炭化物粒微量）
8 暗灰色土　N3/（褐灰色細砂粒・焼土粒・炭化物粒多量）
9 灰色砂質土　N5/（黒褐色土粒微量）
10 灰色粗砂　N5/（褐灰色砂質土とラミナ状に堆積）
※流路上に堆積したⅡb～eは2次堆積
火山灰
0
2m
(1/40)

図65　７号流路跡

本流路跡の堆積土は10層に分けられた。ℓ１は、褐灰色細砂や黒褐色土粒を微量に含む褐灰色砂質土である。土質はＬⅡｅに近似する。流路跡の中央部から南側にかけて堆積している。ℓ２は炭化物粒を微量に含む暗灰色粘質土である。流路跡の全体に堆積している。ℓ３はℓ４を由来とする土粒を微量に含む黒色粘質土である。ℓ４は火山灰を主体とする浅黄色粗砂で、下層のℓ３・５を由来とする土粒を斑状に含んでいる。火山灰分析の結果、榛名伊香保テフラ（Hr－FP）の再堆積という結果を得た。ℓ５は炭化物粒を微量に含む暗灰色粘質土である。ℓ６は褐灰色砂質土で、褐灰色細砂がラミナ状に堆積している。ラミナ状の堆積を示すことから、一定の水量があり流路として機能していた際に堆積した土と判断した。ℓ７・８は褐灰色細砂粒や焼土粒・炭化物粒を含んだ灰色粘質土や暗灰色土である。ℓ７・８は流路跡の南側にのみ堆積しており、この範囲からは多量の土師器が集中して出土していることから、人為による埋め立てと判断した。ℓ９はＬⅢを由来とする灰色砂質土で、黒褐色土粒を微量に含んでいる。地山（ＬⅢ）が２次的に堆積した土と判断した。ℓ10はＬⅤを由来とする灰色粗砂を基調とし、褐灰色砂質土がラミナ状に堆積している。流路として機能していた際に堆積した土と判断した。珪藻分析の結果、ℓ１～３・５・７・９・10が無化石か、産出数が少ないという結果を得た。土質の特徴から、ℓ１～５は流路跡が埋没した後に堆積した土、ℓ６・10は流路跡が埋没中に堆積した土、ℓ７・８は人為による埋め立て、ℓ９は地山の２次堆積と判断している。

遺　　物（図66、写真66・83）

本流路跡からは、土師器321点、土製品２点、石製模造品１点、炉壁7.35ｇが出土しており、このうち土師器６点、土製品２点、石製模造品１点を図示した。土師器はℓ７・８から266点が出土している。炉壁はℓ７から出土している。炭と炉壁が溶融したもので、鍛冶に関連する可能性がある。流路跡の南側周辺、ℓ５・７・８からは多量の土師器が焼土粒や炭化物粒に混じり出土している。完形のものは無く、いずれも割れた状態で折り重なるように出土している。出土状況や堆積土の対応関係から、流路跡を埋め立てた土（ℓ７・８）の中に土師器や炉壁などが混入していたとみられる。

図66－１～４は土師器の杯である。１は丸底で、体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反している。体部下半の内面には、わずかに稜が認められる。外面はヨコナデやユビオサエが、内面にはヘラミガキが施されている。赤彩は内面が全面、外面は体部上半に施されており、塗り分けとみられる。２は体部上半から口縁部にかけて緩やかに外反している。体部上半の内面には、明確な稜が認められる。内外面には、ヘラミガキが施されている。赤彩は外面が体部上半に、内面は稜を境に上のみに施されており、内外面ともに塗り分けとみられる。３・４は丸底で、体部に段を持ち、そこから垂直に立ち上がる。内面にも同様の位置に段が認められる。体部の稜より上位の外面にはヨコナデが施されている。３は底部付近の外面にヘラケズリが施されている。内面には斜め方向のヘラミガキが施されている。赤彩は内外面に認められるが、被熱による剥落が著しい。４は体部から口縁部の内面に、ヨコナデの後にヘラミガキが施されている。

図66－５は土師器の壺である。体部は内傾し、頸部から口縁部にかけて外反している。外面に

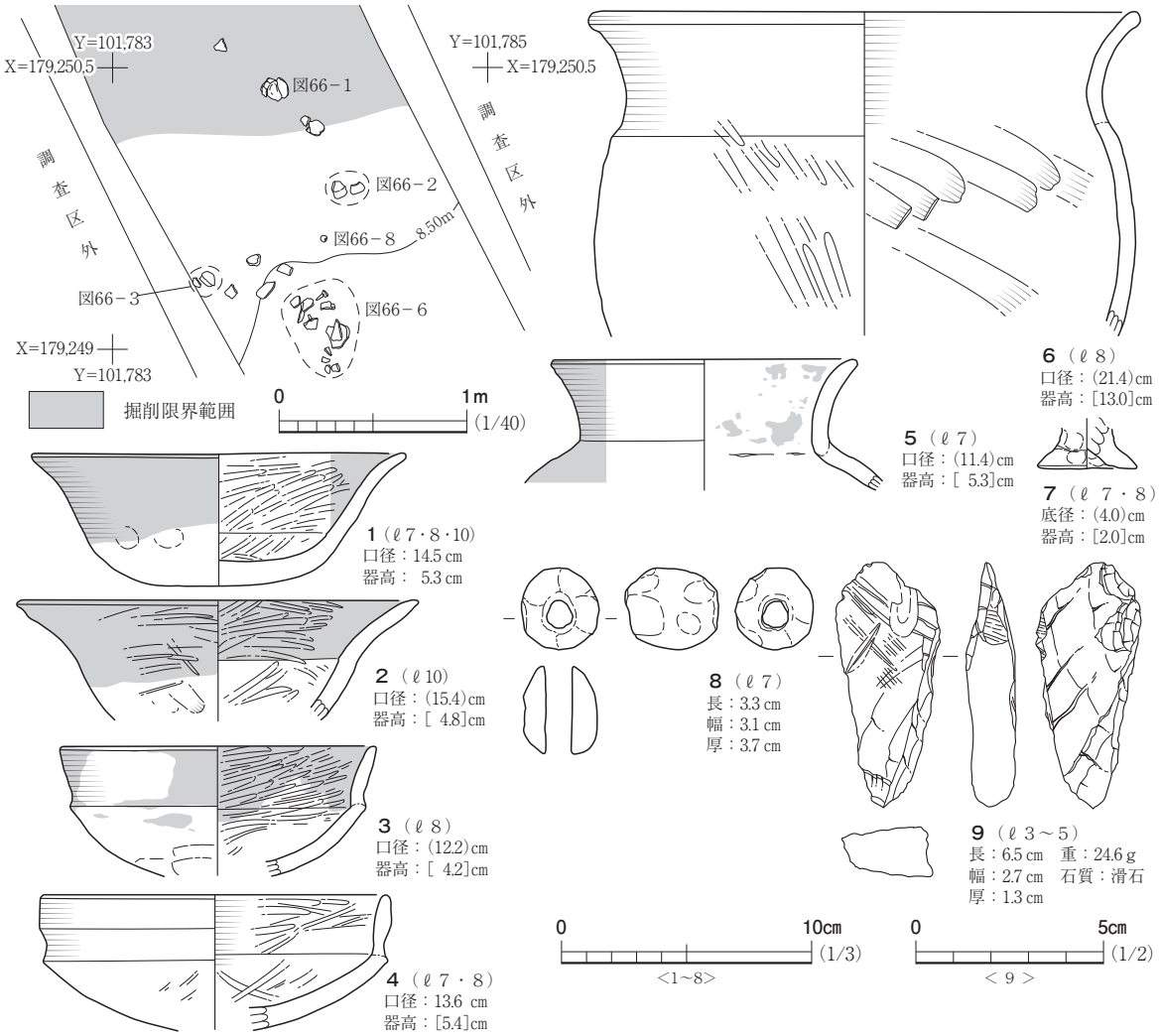


図66　７号流路跡・出土遺物

はヨコナデが施されている。内外面には赤彩が認められるが、剥落が著しい。

図66－６は土師器の甕である。体部はつぶれた球形で、頸部から口縁部にかけて外反している。体部の外面はヘラミガキ、内面はユビナデ・ヘラナデが施されている。

図66－７は高杯形のミニチュア土器とした。脚部とみられ、ユビオサエが施されている。

図66－８は土製の丸玉である。側面は細長い楕円形を基調としている。全面にユビオサエが認められる。胎土は、流路中から出土した土師器に近似する。

図66－９は石製模造品の剣形の未成品と判断した。基部は湾曲し、下端に向けて鋭角となる。表面には研磨や、工具の痕跡とみられる深い線状痕が認められる。右側面の上端は、研磨により平坦となる。

ま と め

本流路跡は概ね北東・南西方向に延び、長さは判明した値で1.98m、幅は最大で12.84m、検出面から掘削可能面までの深さは、最大で43cmを測る。ℓ４は火山灰を主体とする浅黄色粗砂で、榛名伊香保テフラ（Hr－FP）という結果を得た。流路跡の南側は、土師器を多量に含む焼土粒や炭

化物粒に混じり土（ℓ７・８）で人為的に埋め立てを行っている。

本流路跡は、出土した土師器の特徴や火山灰の特徴から、古墳時代中期の５世紀末には形成され、古墳時代後期の６世紀中葉には埋没したと考えられる。

８号流路跡　ＳＤ８（図67、写真52）

本流路跡は、115号水路調査区の南端部、115－23～26グリッドのＬⅢ・Ｖ上面で検出された。牛川から南に160m程離れた沖積地上に立地する。検出面の標高は8.64～8.72mである。本流路跡の周囲に遺構は認められない。本流路跡は、ＬⅢ上面の検出作業により、北側はＬⅡｃ・ｆ、南側は暗灰色粘質土や暗灰色砂が堆積する範囲として確認した。南側の上端はＬⅢの堆積が認められず、ＬＶ上面にて検出した。本流路跡は幅が長大であり、遺構の立ち上がりが極めて緩やかであること、一部でラミナ状となることから流路跡と判断した。本流路跡について、水路工事の掘削が及ぶ深さにまで人力で掘り下げたが、底面が確認できないことから、県教委に報告を行った。県教委から、軟弱地盤でこれより下に掘削すれば壁面崩落の恐れがあることから、現状で記録保存を行い、底面の確認を行わない旨の指示を受け、以上の通り対応した。

本流路跡は概ね北東－南西方向に延び、長さは判明した値で1.8m、幅は最大で27.4m、検出面からの深さは最大で14cmを測る。流路跡の北側はＬⅡｃ・ｆがたるみ込むように堆積しており、南側でℓ１・２が堆積している。ℓ１は暗灰色粘質土で、灰色砂がラミナ状に堆積している。ℓ２は暗灰色砂で、暗灰色粘質土がラミナ状に堆積している。いずれも流路跡が機能していた際に堆積した土と判断した。本流路跡から遺物は出土していない。

所属時期は出土遺物が無く不明だが、検出層位から古墳時代以前に形成されたと推測される。

９号溝跡　ＳＤ９（図68、写真52）

本溝跡は、116号水路調査区の西部、116－４・５グリッドのＬⅡｆ上面で検出された。牛川から南に170m程離れた沖積地上に立地する。検出面の標高は8.98～9.00mである。本溝跡の東側７ｍには、１号整地範囲やＧＰ13が位置している。本溝跡の南北部は調査区外に伸びている。本溝跡は当初、遺構の堆積土をＬⅡｆと誤認して掘り下げを行った。その後、調査区壁面を精査した際に遺構の立ち上がりを確認したことから、遺存しているＬⅡｆ上面で検出作業を行い、灰色砂質土の範囲として確認した。上端の一部は掘りすぎにより遺存していない。

本溝跡は概ね北西－南東方向に延び、長さは判明した値で2.40m、幅は最大で2.24m、検出面からの深さは最大で30.5cmを測る。断面形はⅢ形を基調とし、底面は概ね平坦となる。

遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１は灰色砂質土で暗灰色粘質土がラミナ状に堆積している。土質の性状から自然堆積と判断した。ℓ２はＬⅡｆを由来とする暗灰色粘質土で、炭化物粒を微量に含む。ＬⅡｆが２次的に自然堆積した土と判断した。ℓ３は灰色砂質土で灰色粘質土とラミナ状に堆積している。底面付近に薄く帯状に堆積しており、本溝跡の機能時に自然堆積した土と判断した。

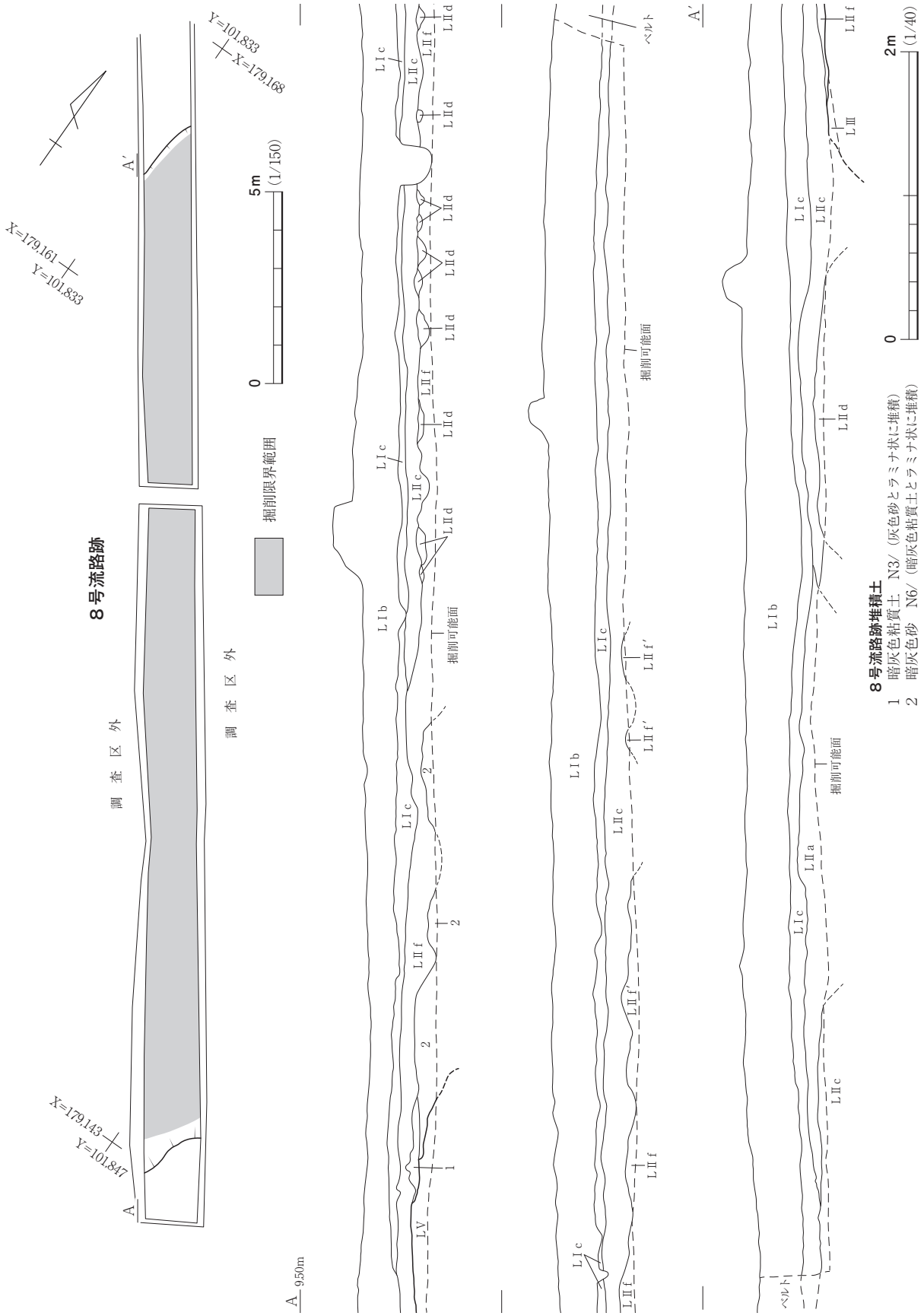

8号流路跡
調査区外
調査区外
掘削限界範囲
5m
0
(1/150)
2m
0
(1/40)
X=179.161
Y=101.833
X=179.168
Y=101.833
X=179.143
Y=101.847
A
A′
9.50m
掘削可能面
ベルト
8号流路跡堆積土
1　暗灰色粘質土　N3/（灰色砂とラミナ状に堆積）
2　暗灰色砂　N6/（暗灰色粘質土とラミナ状に堆積）

図67　８号流路跡

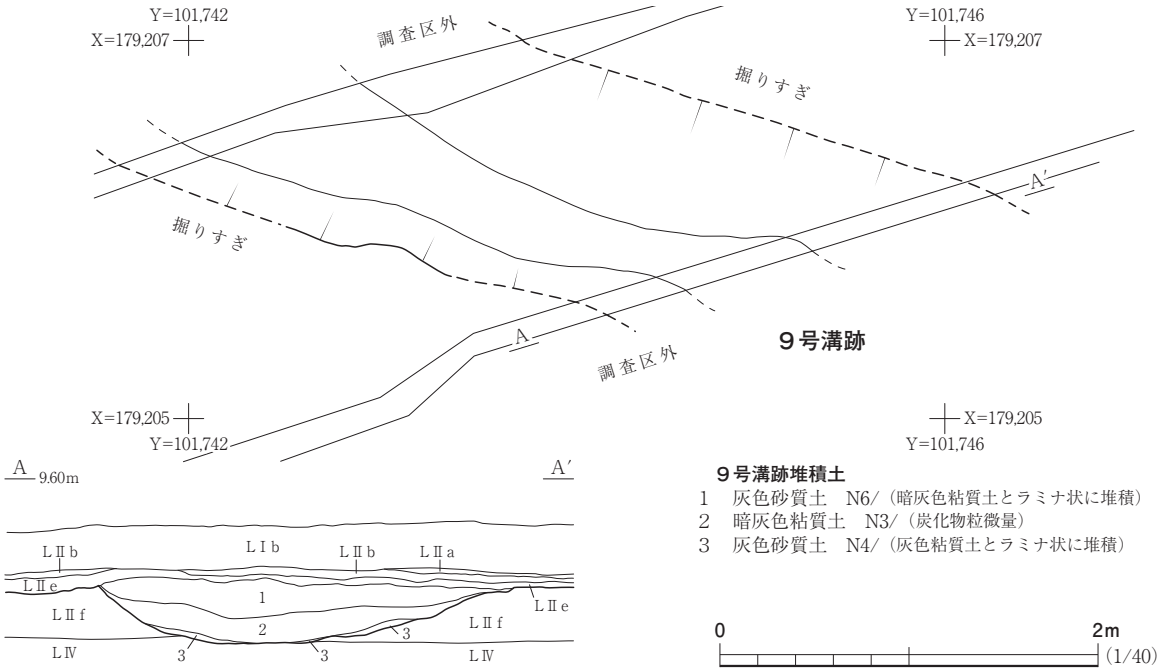


図68　９号溝跡

所属時期は出土遺物が無く判然としないが、検出層位から概ね古墳時代と推測される。

第５節　遺物包含層

１号遺物包含層　ＳＨ１

遺　　構（図69、写真48・49）

本遺物包含層は、119号水路調査区の中央部から東部、119－６～８グリッドに位置する。牛川から南に60m程離れた沖積地上に形成され、南北部は調査区外に伸びている。検出面の標高は8.86～9.08mである。本遺物包含層は複数遺構と重複関係が認められ、３号溝跡、１号土坑、GP５～７より新しく、３号住居跡、GP３より古い。

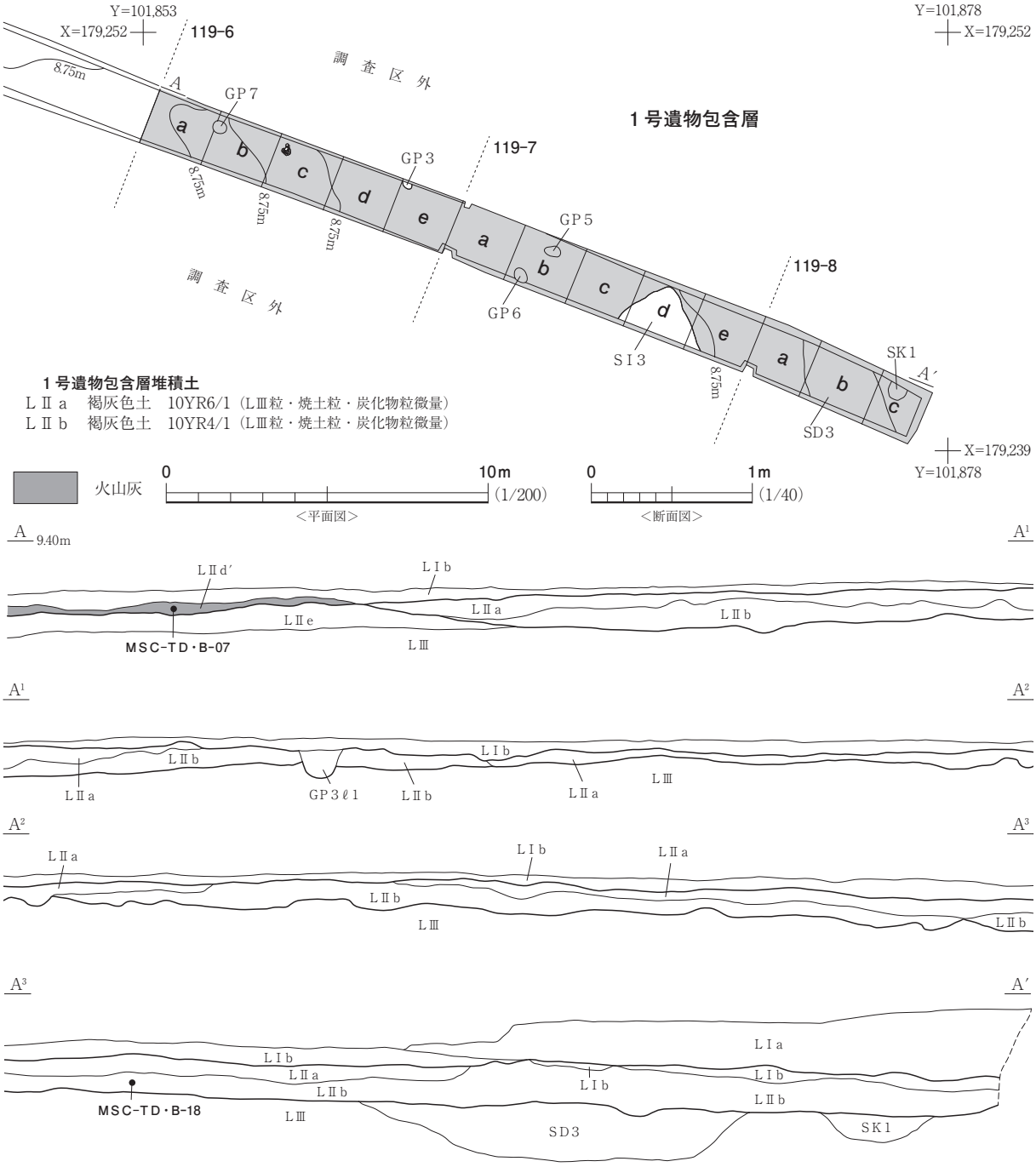
本遺物包含層は表土除去後のＬⅡａ・ｂ上面で土師器が集中して出土したことから、遺物包含層として調査を開始した。グリッドを２ｍごとに区画分けし、それぞれ小文字のアルファベットを表記して遺物の取り上げを行った。

本遺物包含層はＬＩｂの直下のＬⅡａ・ｂを基調に形成される。遺存している規模は東西方向で25.6m、南北方向で２ｍ、深さは最大で29㎝である。

遺　　物（図70・71、写真66～68・84）

本遺物包含層からは、土師器1,237点、須恵器６点、弥生土器3点が出土した。このうち、土師器16点、須恵器３点、弥生土器２点、土製品１点、石製品１点を図示した。

図70－11・12の土師器の甕は破片でまとまって出土し、その北側には、図70－５の土師器の器台が横倒しで出土している（図69参照）。



出土遺物点数一覧

グリッド	土師器	須恵器	弥生土器	グリッド	土師器	須恵器	弥生土器
119－6a	80	1		119－7c	164	1	1
119－6b	56			119－7d	69		
119－6c	151	3	1	119－7e	96		
119－6d	37			119－8a	78	1	
119－6e	113			119－8b	131		
119－7a	99		1	119－8c	43		
119－7b	120						

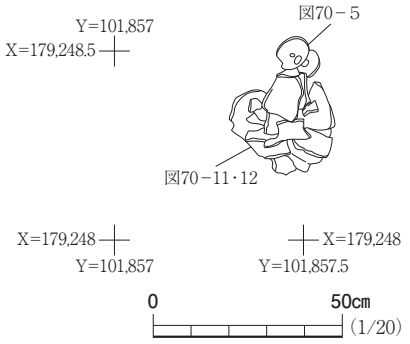


図69　1号遺物包含層

図70－１～３は土師器の杯である。１・２は丸底で、体部から口縁部にかけて強く外反する。内面には稜が認められる。赤彩は内外面に認められるが、一部は使用や経年劣化により剥落している。１の内外面にはヨコナデ、底部の外面にはヘラケズリが施されている。２は内外面に丁寧なヘラミガキが施されている。外面の底部には黒斑が観察される。３は体部から口縁部にかけて、直線的に立ち上がる。外面にはヨコナデが、内面にはヨコナデの後、ヘラミガキが施されている。外面には赤彩が、内面には黒色処理が施されている。

図70－４は土師器の鉢である。形態から有孔鉢の可能性がある。体部から口縁部かけて直線的に立ち上がる。口縁部付近には、粘土紐を上下２重に巻いて、隆帯を形成している。隆帯の付設は粗雑で、調整は行われない。内外面にはヘラケズリが施されている。

図70－５は土師器の器台である。完形で、脚部は「八」字状に開き、受け部は湾曲し、口縁端部は摘み上げられる。脚部には３箇所に円窓が認められる。受け部の内外面はヨコナデとヘラミガキが施されている。脚部は外面にヘラミガキ、内面にはユビナデ、ユビオサエが施されている。

図70－６は土師器の高杯である。棒状の脚部で、内面には粘土粒を押し込んでいる。

図70－７～10は土師器の壺である。７は頸部から口縁部にかけて直立して立ち上がり、口縁端部は内面に向け傾斜している。内外面にはヨコナデが施されている。８・９は２重口縁の壺で、外面には連続したキザミが施されている。８は外面にヨコナデの後ハケメが、内面の調整は古い順ヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキが施されている。９の外面の調整は古い順からヨコナデ→ハケメ→ヘラミガキが施されている。内面にはハケメ・ユビナデの後ヘラミガキが施されている。

図70－11～15は土師器の甕である。11は平底から直線的に立ち上がり、体部中ほどから頸部に向かい内湾し、口縁部は急に外傾する。外面は頸部と底部下半がハケメ、体部中央と底部付近にヘラケズリが施されている。内面は体部付近にユビナデやヘラケズリが、底部付近にはハケメが施されている。外面は体部下半は被熱により赤化している。12は球形の体部で、頸部から口縁部に向かって外傾している。内外面ともに摩滅しており調整は判然としないが、外面の頸部から体部上半にかけてハケメが認められる。13は外面にハケメが施されている。14は体部下半は湾曲し、上半で直立しながら立ち上がり、口縁部は外反している。外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキが施されている。15は口縁部が外反している。外面はヨコナデの後、ユビナデ、ヘラケズリが施されている。

図70－16は手づくね土器とした。粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。

図71－１～３は須恵器である。１は瓶である。外傾する頸部付近とみられ、外面には突帯と波状文が施されている。焼成は良好で、胎土は緻密である。内面には降灰の痕跡が観察される。２・３は甕の肩部とした。外面には平行タタキが、内面には同心円の当て具痕が認められる。

図71－４は類例から、鋤先形の土製品と判断した。ユビオサエで成形されている。

図71－５・６は弥生土器である。５は天神原式の壺で、外面には２本１単位の平行沈線文が施され、これを起点として羽状構成となる付加条の縄文がめぐる。６は十王台系の壺で、外面には櫛描による波状文が上下に２段にわたり施されている。波状文は上段は短く、下段は長い振幅となる。

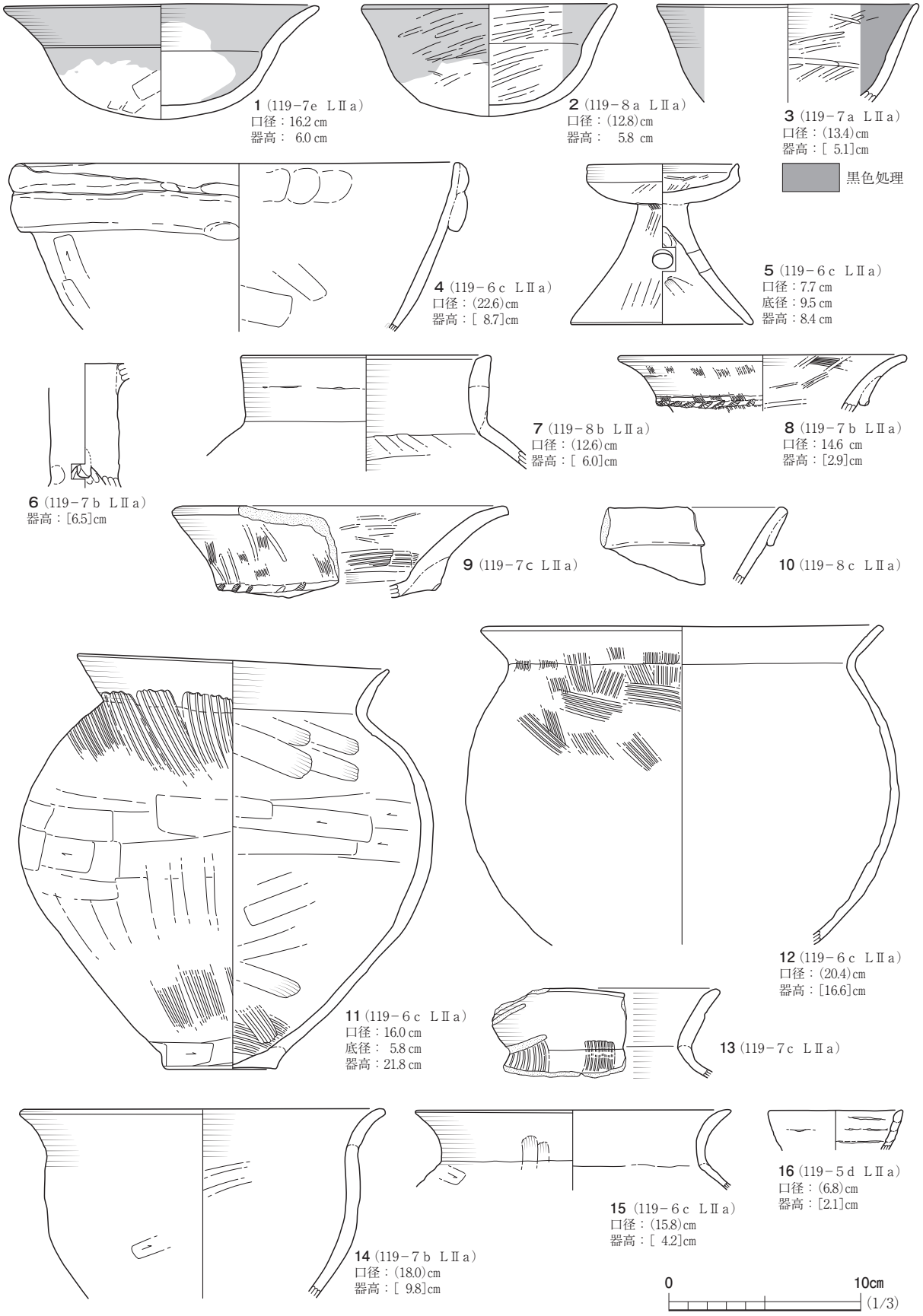


図70　1号遺物包含層出土遺物（1）

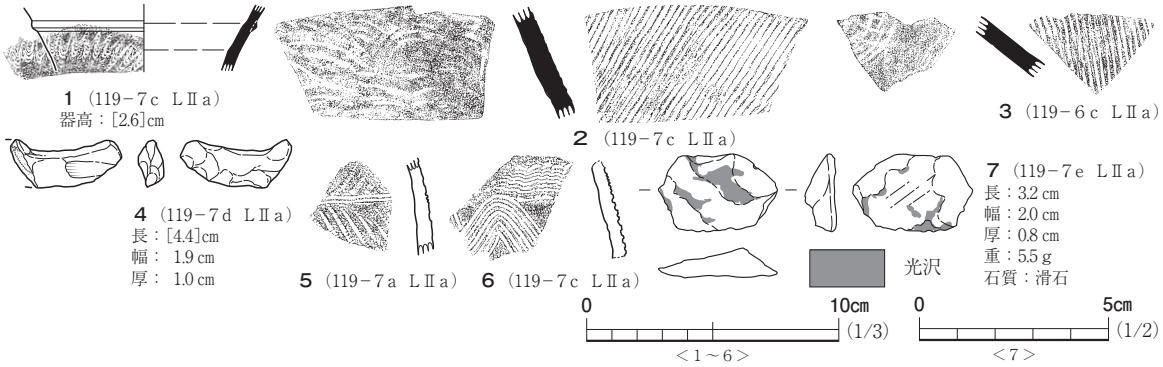


図71　１号遺物包含層出土遺物（２）

図71－７は石製模造品の有孔円板の未成品と判断した。裏面には研磨が認められる。表裏面には光沢が確認できる。

ま と め

本遺物包含層は牛川から南に60m程離れた沖積地上に形成されている。遺存している規模は東西方向で25.6mに及ぶ。形成された年代は出土遺物から、弥生時代中期後葉から、古墳時代後期、６世紀初頭にかけてと判断した。

第６節　整 地 範 囲

１号整地範囲

遺　　構（図72、写真６・50）

本遺構は、116号水路調査区の中央部、116－５～７グリッドのＬⅡｆ上面で検出された。牛川から南に150m程離れた沖積地上に立地する。検出面の標高は8.86～8.98mである。12号住居跡やＧＰ13と重複し、本遺構が古い。本遺構の南北部は調査区外に伸びている。

本遺構は、当初ＬⅡｅと同一層と考え、人力で掘り下げを行った。その後、調査区壁面において基本土層を確認した結果、①ＬⅡｅと比較して粘性があること、②ＬⅡｅにみられない灰白色の砂が特徴的に含まれること、③ＬⅡｆとの層界が波状に乱れること、④堆積する範囲が限定的であること、⑤上面から掘り込む遺構が認められることから、人為的に整地を行った範囲と判断して調査を行った。また、当初は12号住居跡に伴う周堤帯の基部とも考えたが、堆積土が広範囲に及ぶことから、その可能性については除外した。

本遺構は東西方向で19.6m、南北方向で２m以上の範囲に及び、検出面からの深さは最大で15cmを測る。整地上面は平坦に整えられるが、整地土の堆積した範囲の底面は凹凸が多い。

本遺構の堆積土はＬⅡｆ・黒褐色土・灰白色砂の混合土となり、炭化物粒を微量に含む褐灰色土の単層である。下層であるＬⅡｆとの層界は波状に乱れる。古環境分析によれば、植物珪酸体にはクマザサやメダケ亜科、ヨシ属、ススキ属などが認められた。乾いた環境に生育する種と湿潤な環境に生育する種の両方がみられ、混合土とする所見を肯定する結果を得ている。

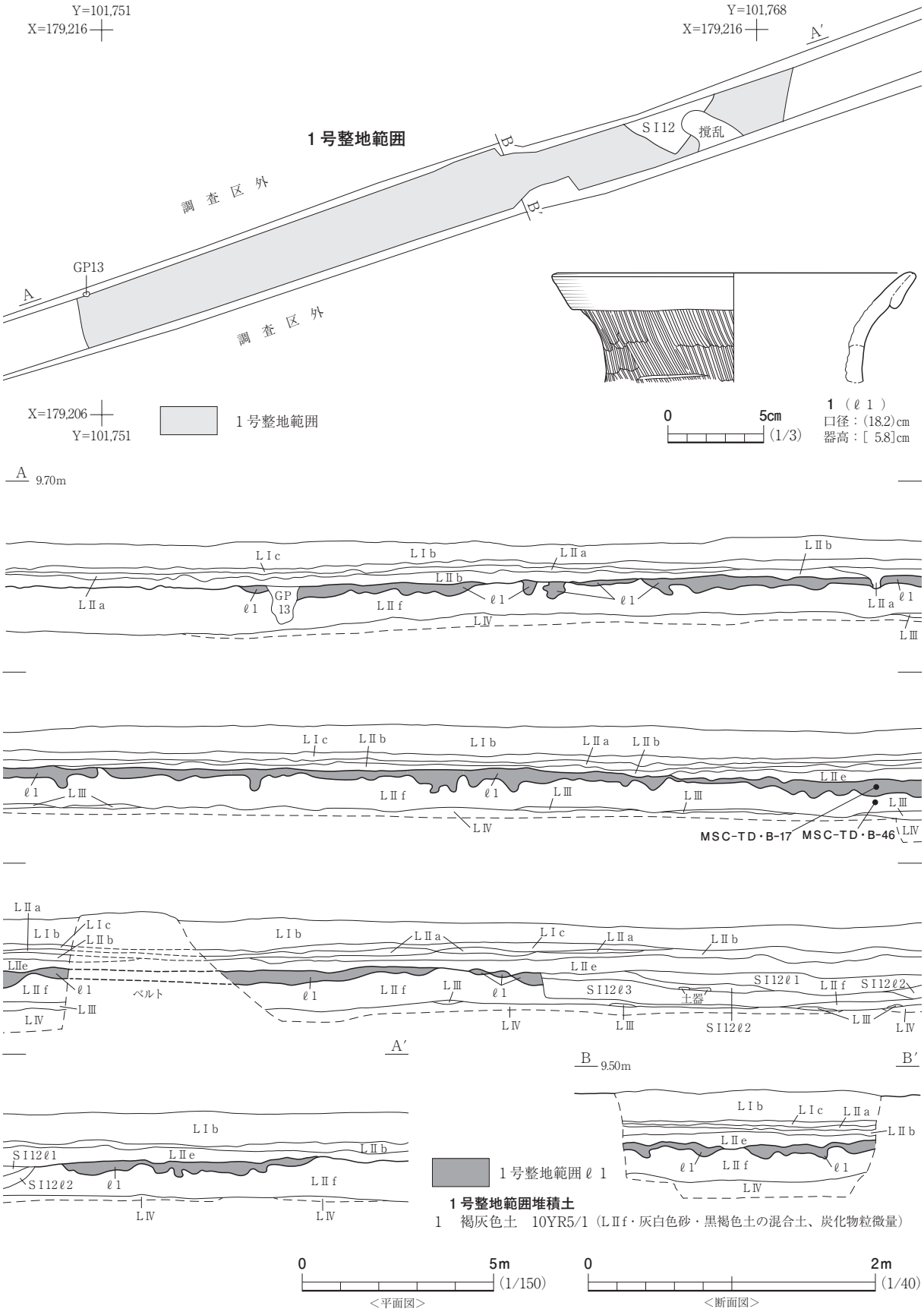


図72　1号整地範囲・出土遺物

遺　　物（図72）

本遺構からは、土師器70点、弥生土器２点が出土しており、土師器１点を図示した。

図72－１は土師器の壺である。２重口縁で、頸部の下端は粘土紐の積み上げ部分で剥離している。頸部から口縁部にかけて外反している。口縁部の外面にはヨコナデ、頸部の外面にはハケメが施されている。内面は剥離が著しい。

ま と め

本遺構は、牛川から離れた沖積地上に立地する。東西方向で19.6mの範囲に整地範囲が確認できた。本遺構は①整地範囲の下層は泥炭質のＬⅡｆとなり凹凸が著しいこと、②整地土に灰白色砂を混和させていること、③整地の範囲内には12号住居跡やＧＰ13が位置することからから、住居などの施設構築に際し、脆弱な地盤の整地を試みたものと思われる。

本遺構の所属時期は、12号住居跡に伴うものと判断し、古墳時代中期、５世紀前半と考えられる。

第７節　小　穴　群　（図73・74、写真52）

本遺跡では小穴を13基確認した。小穴は、住居跡や土坑の分布と重複する傾向が認められる。検出面はＬⅢがＧＰ１・２・４～7と最も多く、ＳＨ１（ＬⅡｂ）がＧＰ３、ＬⅡｅがＧＰ８～10、ＬⅡｆがＧＰ11・12、１号整地範囲がＧＰ13である。重複からみた新旧関係は、ＧＰ５～７は１号遺物包含層より古く、ＧＰ３は１号遺物包含層より新しい。ＧＰ13は１号整地範囲より新しい。

平面形は楕円形が多く、規模は22～62㎝、深さは22～67㎝である。小穴の堆積土はＬⅢに由来する灰色砂質土や、ＬⅡｅに由来する暗灰色土が多い。堆積土中には炭化物粒や焼土粒、粘土が混入するものが多い。ＧＰ１は掘形を持つ柱穴とみられ、柱根が遺存していた。柱根は樹皮が残り、下端部は平坦に加工されていた。小穴群からは土師器が出土しており、内訳はＧＰ１が３点、ＧＰ３が１点、ＧＰ６が７点、ＧＰ11が１点である。いずれも摩滅し小片のため図示していない。

小穴群の性格は、GP１が柱穴と考えられ、それ以外のものは規則性が認められず不明である。所属時期は、ＧＰ１・３・６・11は出土した土器の特徴から概ね古墳時代、ＧＰ５～7は１号遺物包含層より古く古墳時代後期以前、ＧＰ13は１号整地範囲より新しく古墳時代中期以降と考えられる。

第８節　遺構外出土遺物（図75・76、写真51・67～69・84）

遺構外からは、弥生土器48点、土師器1,695点、須恵器６点、陶磁器８点、石器・石製品11点、石製模造品６点、鉄滓１点土師器転用研磨具１点が出土し、このうち、24点を図示した。

土師器は調査区の全域から出土しており、特に116－３～10グリッドのＬⅡｂ・ｆから多く出土している。116－９グリッドのＬⅡｆ上面からは、図76－１・２の土師器甕がまとまって出土している（図75参照）。石製模造品は、116－５・７グリッド付近のＬⅡｂ・ｆから４点が出土している。

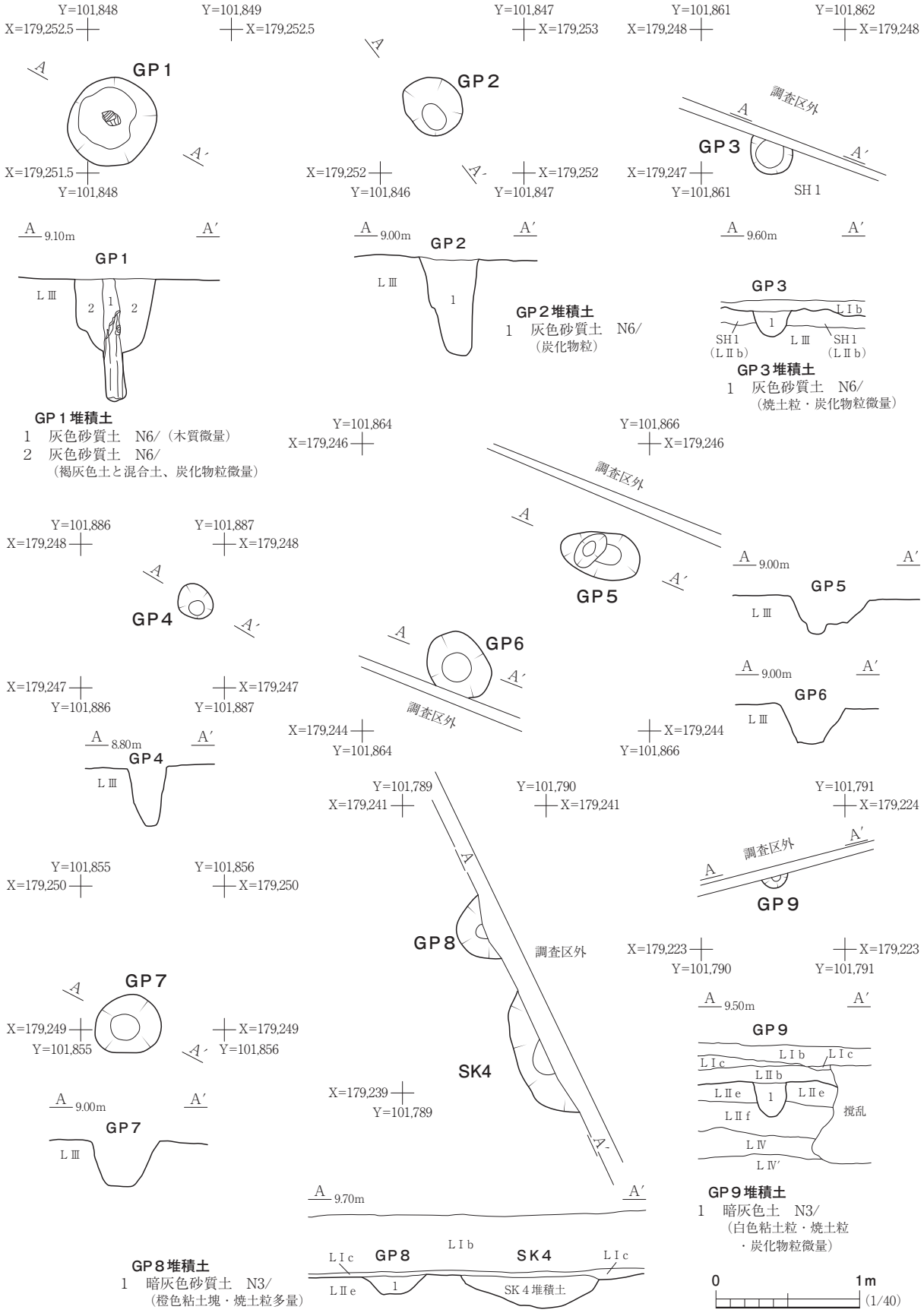

GP１
GP１堆積土
1　灰色砂質土　N6/（木質微量）
2　灰色砂質土　N6/
（褐灰色土と混合土、炭化物粒微量）
GP２
GP２堆積土
1　灰色砂質土　N6/
（炭化物粒）
GP３
GP３堆積土
1　灰色砂質土　N6/
（焼土粒・炭化物粒微量）
GP４
GP５
GP６
GP７
GP８
GP８堆積土
1　暗灰色砂質土　N3/
（橙色粘土塊・焼土粒多量）
SK４
SK４堆積土
GP９
GP９堆積土
1　暗灰色土　N3/
（白色粘土粒・焼土粒
・炭化物粒微量）
調査区外
SH１
LⅢ
LⅠb
LⅠc
LⅡb
LⅡe
LⅡf
LⅣ
LⅣ′
撹乱
0　1m
(1/40)

図73　小穴（１）

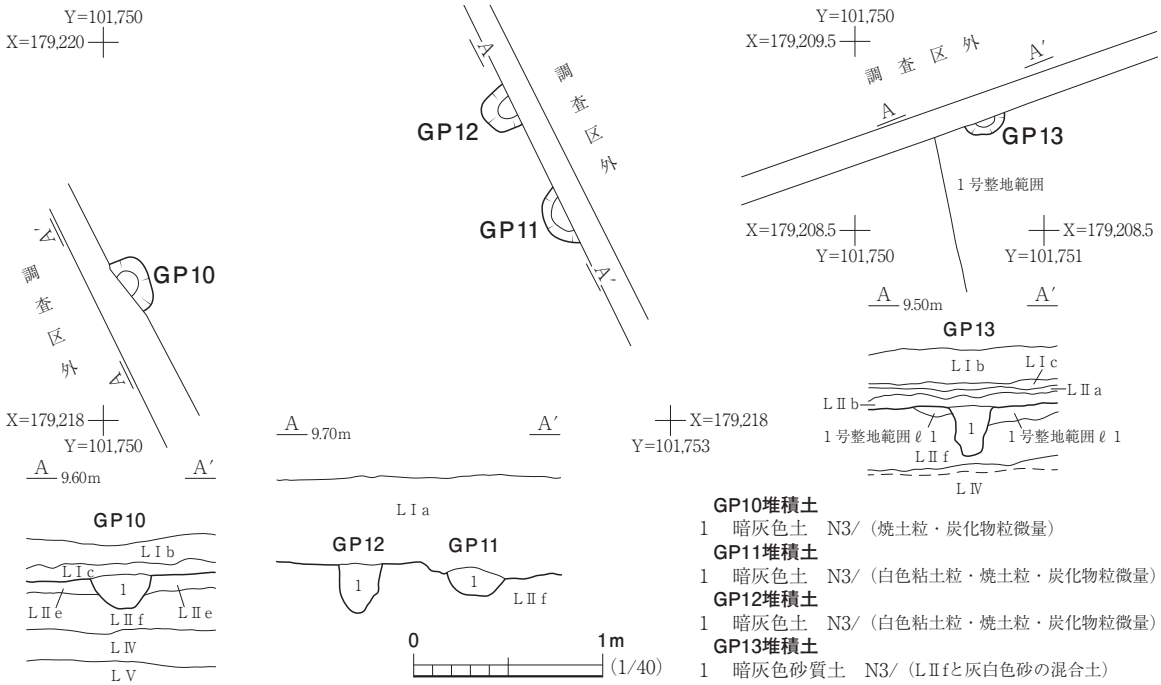


図74　小穴（2）

弥生土器はいずれも小片で、116－3～9グリッド付近で定量出土している。また、116－10グリッドで製錬滓39.03ｇが出土している。

図76－1・2は土師器の甕である。体部は球形で、頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。口縁部の内外面にはヨコナデやハケメが、体部外面にはハケメが施されている。1は体部にハケメを施した後に、口頸部を成形している。2の体部内面には、ヘラ状工具の痕跡が認められる。

図76－3は土師器転用研磨具である。土師器杯の内面を使用している。研磨によって形成された断面が浅い「U」字形の溝が4条確認できる。溝の内側には微細な擦痕が認められる。遺存の良好な溝の規模は、上端幅が7㎜、下端幅が3㎜である。杯としての器形は、体部から口縁部に向かい緩やかに外反し、体部中位の内面には稜が認められる。内外面には赤彩が施されている。

図76－4～9は石製模造品である。4～7は有孔円板である。4・5は円形で、中央に2つの穿孔が施されている。4は中央部が厚く、外縁は薄くなり、断面形はレンズ形である。5は比較的小型で、表面の側縁には明確な稜が認められる。6・7は小片で、1つの穿孔が確認できる。8・9は剣形で、上端に1つの穿孔が確認できる。8の上端は湾曲し、下端は鋭く尖がる。表面には斜行した「I」字形の鎬が表現されている。表面の穿孔付近には工具痕が認められる。9は扁平で、表面は斜位、裏面は複数方向の線状痕が認められる。断面形は台形を呈する。

図76－10は用途不明の石製品である。上端部には1つの穿孔が確認できる。上端部は厚く、下端に向け薄く成形されている。右側面には、連続した工具の痕跡が認められる。

図76－11は剥片である。扁平な縦長の剥片で、石材は滑石であることから、石製模造品の製作に伴う廃棄剥片の可能性がある。

図76－12～21は弥生土器である。12は蓋である。短い摘み部が付される。内外面にはユビナデ

が施されている。胎土中には繊維が混和される。13は壺の上半部とみられ、外面には平行沈線で重山形文が施されている。14～16は甕である。14・15は口縁部に向かい外傾しながら立ち上がる。口縁端部にはキザミが、外面には０段多条の地文が認められる。16は、口縁端部にキザミが、外面には、地文と沈線文が認められる。17～21は壺である。17・18は外面に隆帯が貼付けられ、その上から17は上位に沈線文、下位に刺突文が、18は上下二段の刺突文が施されている。19には棒状工具による連続した押圧、撚糸の地文が施されている。20は一本引きの平行沈線が認められる。21は肩部の外面に、連続した列点状の刺突文が認められる。

図76－22～24は石器である。22は礫器とした。縦長で楕円形の礫を用い、腹背面の下端には剥離が認められる。23は石核とした。上側面には自然面が認められ、 横方向や下方向に打点を転移しながら剥離を行っている。24は剥片である。薄く扁平で､背面には自然面や節理面が認められる。

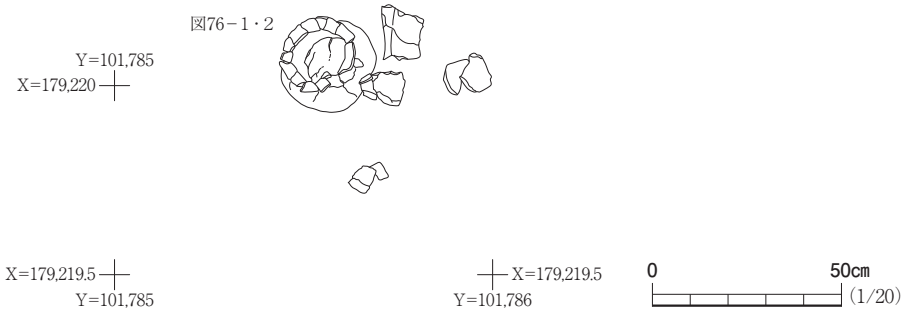


図75　遺構外遺物出土状況

表10　遺構外出土遺物点数表

グリッド	層位	弥生	土師器	須恵器	陶磁器	石器・石製品	石製模造品	鉄滓	土師器転用研磨具
115－1	撹乱		21	1	1				
115－2	ＬⅡｂ	2							
115－2	撹乱	1	9						
115－4	ＬⅡａ	2	9						
115－4	ＬⅡｃ		2						
115－4	ＬⅡｅ		30						
115－7	撹乱		21						
115－9	ＬⅡｄ		24						
115－12	ＬⅡｄ		27						
115－13	ＬⅡａ	1	70						
115－13	ＬⅡｂ		4						
115－13	ＬⅡｃ					1			
115－14	ＬⅡａ		20						
115－14	ＬⅡｂ		11						1
115－14	ＬⅡｆ		3						
115－16	ＬⅠｃ		40	1					
115－17	ＬⅠｃ	2	35						
115－17	ＬⅡｂ						1		
115－18	ＬⅠｃ		5						
115－21	ＬⅠｂ	1				1			
115－23	ＬⅠｂ		7						
115－23	ＬⅡａ		1			2			
115－24	ＬⅡｃ		1	1					
115－25	表土			1					
116－3	ＬⅠｂ	7	30				1		
116－3	ＬⅡｆ	4	21						
116－4	ＬⅠｂ		23						
116－4	ＬⅡｂ	2	120						
116－4	ＬⅡｆ	1	8						
116－5	ＬⅡｂ		76						
116－5	ＬⅡｆ	1	51				3		
116－6	ＬⅠｂ		26						
116－6	ＬⅡｂ	6	80						
116－6	ＬⅡｆ	4	18						
116－7	ＬⅠｂ		30						
116－7	ＬⅡａ		50			1			
116－7	ＬⅡｂ		30				1		
116－7	ＬⅡｆ	2	30						
116－8	ＬⅡｂ		147			2			
116－8	ＬⅡｆ		33						
116－9	ＬⅡｂ	2	153	1		1			
116－9	ＬⅡｃ		30						
116－9	ＬⅡｆ	7	95						
116－10	ＬⅠｃ		38						
116－10	ＬⅡｂ		14						
116－10	ＬⅡｆ		10					1	
116－15	ＬⅡｅ		3						
119－2	ＬⅠｂ		27		1				
119－3	ＬⅡａ		25						
119－5	ＬⅡａ		59			1			
119－9	撹乱		2						
119－10	撹乱		15						
119号水路	排土		60			1			
119号水路	表採	3	51	1	6	1			
合	計	48	1695	6	8	11	6	1	1

1（116－9 LⅡf）
口径： 16.8 cm
器高：[17.7]cm
2（116－9 LⅡf）
口径： 19.3 cm
器高：[13.2]cm
3－転用前
3（115－14 LⅡb）
長：4.8 cm 幅：4.0 cm 厚：0.8 cm
4（116－3 LⅠb）
長：3.3 cm 重：9.1 g
幅：3.4 cm 石質：滑石
厚：0.6 cm
5（116－5 LⅡf）
長：1.7 cm 重：1.7 g
幅：1.6 cm 石質：滑石
厚：0.4 cm
6（116－5 LⅡf）
長：2.2 cm 重：3.8 g
幅：2.8 cm 石質：滑石
厚：0.6 cm
7（116－5 LⅡf）
長：2.1 cm 重：1.1 g
幅：1.1 cm 石質：滑石
厚：0.3 cm
8（116－17 LⅡb）
長：4.5 cm 重：7.7 g
幅：1.9 cm 石質：滑石
厚：0.7 cm
9（116－7 LⅡb）
長：4.5 cm 重：8.1 g
幅：2.3 cm 石質：滑石
厚：0.5 cm
10（119－5 LⅡa）
長：[5.8]cm 重：15.0 g
幅：[2.0]cm 石質：頁岩
厚： 1.4 cm
11（115－17 LⅠc）
長：3.7 cm 重：2.6 g
幅：1.3 cm 石質：滑石
厚：0.5 cm
12（116－4 LⅡf）
口径：6.0 cm
器高：[1.5]cm
13（115－2 撹乱）
14（115－2 LⅡb）
15（116－6 LⅡb）
16（116－6 LⅡb）
17（115－6 LⅡf）
18（116－6 LⅡf）
19（116－7 LⅡf）
20（116－6 LⅡf）
21（115－4 LⅡa）
22（116－9 LⅡb）
長：7.4 cm 重：109.3 g
幅：4.6 cm 石質：角閃岩
厚：2.1 cm
23（116－7 LⅡa）
長：6.7 cm 重：49.7 g
幅：4.4 cm 石質：流紋岩質凝灰岩
厚：2.5 cm
24（115－1 撹乱）
長：2.1 cm 重：1.2 g
幅：1.9 cm 石質：粘板岩
厚：0.3 cm
節理面
0 10cm (1/3)
＜1～3・12～24＞
0 5cm (1/2)
＜4～11＞

図76　遺構外出土遺物

第２章　総　括

第１節　遺　構

本節では、各時期の主要な遺構の特徴を概観し、周辺遺跡と比較しながら若干の検討を行う。

古墳時代前期　住居跡が４軒（ＳＩ１・４・５・11）、土坑が１基（ＳＫ２）確認された。住居跡は牛川から南に①約30～40m離れた箇所と、②約70～80m離れた２箇所にまとまって分布している。住居跡の平面形は、調査区の幅が狭く不明瞭だが、方形や不整円形と推測されるものが多い。一辺の規模は、遺存の良好な４号住居跡で一辺3.62mとなる。住居内施設は認められないものが多く、５号住居跡のみで溝１条、小穴５基が認められた。貼床や掘形は１・５・11号住居跡で認められた。

当該地域における古墳時代前期の集落跡の立地を概観すると、新井田川水系では、湊遺跡、荒井前遺跡、高見町Ａ遺跡、真野川水系では、八幡林遺跡など、主要河川に近接して認められる。今回の発掘調査により、同様の立地である太田川や牛川沿いに集落が営まれたことが明らかとなった。太田川の北岸に位置する町川原遺跡では、古墳時代前期の壺が出土しており、塚田遺跡では高杯が採集されていることから（荒2022）、太田川沿いに古墳時代前期の集落が点在した可能性がある。

太田川流域に位置する古墳について、本遺跡から西方、約2.9㎞の距離に位置する上太田前田古墳が挙げられる。上太田前田古墳は主軸長31mの前方後円墳として周知され、発掘調査は行われておらず詳細な造営時期は不明だが、古墳時代前期の可能性が指摘されている（荒2022）。よって本遺跡で確認された集落跡は、上太田前田古墳など首長墓の造営を担った集落の可能性がある。

古墳時代中期・後期　住居跡が８軒（ＳＩ２・３・６～10・12）、土坑が３基（ＳＫ１・３・５）、自然流路跡が５条（ＳＤ１・４～７）、溝跡１条（ＳＤ３）、整地範囲１箇所（１号整地範囲）が確認された。住居跡は古墳時代前期と同様に２箇所にまとまって分布しており、前期から断続的に集落が営まれたとみられる。住居跡の平面形は、調査区の幅が狭く不明瞭だが、方形基調と推測されるものが多く、一部で楕円形のものも認められる。一辺の規模は、遺存の良好な９号住居跡で一辺3.35mとなる。住居内施設にカマドは認められず、壁際に小穴を持つものが多い。12号住居跡Ｐ１は、位置と規模から貯蔵穴と考えられる。８号住居跡では、床面から３箇所の焼土範囲が確認され、炉の可能性がある。貼床や掘形は、３・７・10・12号住居跡で認められる。12号住居跡の周辺には１号整地範囲が位置しており、地山となるＬⅡｆが粘土質であることから、砂質土で整地を行い、居住性を高めているとみられる。また、試掘確認調査では、115－９・10グリッドから西側40m付近に位置する６号トレンチにて、複数の竪穴状遺構が確認されている（木村ほか2018）。自然流路跡は、調査範囲の全域に分布しており、牛川や太田川に付随する不規則な分岐河川とみられる。各流路跡の堆積土には、一定の共通性が認められることから、調査範囲外で離合する可能性がある。試掘確認調査では、１号流路跡の南側10m付近に位置する20号トレンチにて流路跡がみつかっている。

これらのことから、本遺跡では、牛川や太田川に伴う不規則な分岐河川沿いの地表化した場所に集落が点在していたとみられる。６号住居跡の床面には石屑がまとまって認められ、土師器転用研磨具や剥離を持つ蛇紋岩の原石が出土しており、石製模造品･臼玉の製作に伴う工房の可能性がある。下太田地区では、牛川や太田川沿いに立地する塚田遺跡や下太田高田遺跡で、古墳時代中期・後期の土師器が出土している（荒2022、木村ほか2023）。荒淑人は、当該地域における古墳時代中期の集落が積極的に沖積低地へ進出すると指摘しており（荒2022）、本遺跡や周辺遺跡の立地からも同様の傾向がうかがえた。今後、太田川流域の集落を掌握し、低地の開発を担った首長の居館や墳墓の発見が期待される。

第２節　遺　物

本遺跡で認められた遺物は、弥生時代中期中葉・後葉、弥生時代後期・終末期、古墳時代前期、古墳時代中期～後期があげられる。ここでは、各時代の主要な遺物（石製模造品・臼玉を除く）の特徴を概観するとともに、若干の検討を行う。年代観について、青山博樹（青山2010）、柳沼賢治（柳沼1999）、佐久間正明（佐久間2012）、村田晃一（村田2007）の論考を参考にした。

弥生時代中期中葉・後葉　１号遺物包含層や遺構外から、壺の体部片３点が出土している。図76－20は、１本引きの平行沈線文が施され、陣場式とみられる。図76－13は、２本引きの平行沈線文がみられることから桜井式、図71－５は羽状構成の地文に平行沈線文がみられ、天神原式の範疇として捉えられる。本遺跡より北側の丘陵上には、中期中葉・後葉の遺物包含層が確認された川内廻Ｂ遺跡群、中期後葉の土器棺墓が確認された蛭沢遺跡群が立地している（南相馬市教委2011）。今回の調査により、下太田地区では人々の活動範囲が丘陵上だけではなく、河川に近い低地にも広がることが判明した。

弥生時代後期・終末期　１号遺物包含層や遺構外を主体に甕とみられる土器片９点が認められる。広義の天王山式や十王台系を主体とし、北陸系とされる法仏式の影響を受けた甕（図76－21）が認められる。肩部に列点が施される甕で、福島県内の全地域で認められる。浜通り地域では、いわき市植田郷Ｂ遺跡（和深2002）・玉山古墳（木幡ほか2009）の出土例が挙げられる。田島明人は、屋敷段階における福島県域の北陸系･折衷系土器の出土状況から、「東北南部地域での、浜通り、中通り、会津、越後を結ぶ「東北南部横断ルート」の存在」を想定している（田島2012）。本遺跡から出土した北陸系土器は、弥生時代終末期における浜通り地域と西方との交流を示す資料として評価できる。

古墳時代前期　遺跡全体での土器の出土数は少量ながら、１・４・５･11号住居跡に伴う資料があり、ほかに１号遺物包含層や遺構外などから出土している。器種組成は、高杯、器台、二重口縁壺、甕、小型丸底壺・鉢、鉢、甕、台付甕である。本遺跡で出土した器種の特徴として、高杯は棒状脚が多く、甕は体部が球形で、明瞭なハケメが施されていることがあげられる。以上のことを勘案すると所属時期は、青山編年（青山2010）の塩釜３式古相段階と考えられる。